

永遠の真理

ETERNAL TRUTH



2020 年 9 月

「闘争と勇氣」「死後に何が起ころか（Ⅱ）」「聖霊による一致」「ひよこ豆のベジメンチカツ風」

永遠の真理

いま永遠の真理の土台の上に堅く立ちなさい。(3T p.45)

目次

今月の聖書勉強

死後に何が起こるか (II)

4

聖書の教え

朝のマナ

闘争と勇気

7

Conflict and Courage

現代の真理

「聖霊による一致」

38

わたしたちが信仰の一致に到達するまで

力を得るための食事

「ひよこ豆のベジメンチカツ風」

44

レシピ

お話コーナー

「主はよみがえられた (I)」

46

イエスの物語

【正丸教会】

〒368-0071 埼玉県秩父郡横瀬町芦ヶ久保 1607-1
電話：0494-22-0465

【高知集会所】

〒780-8015 高知県高知市百石町 1-17-2
電話：088-831-9535

【沖縄集会所】

〒905-2261 沖縄県名護市天仁屋 600-21
電話：0980-55-8136

アクセス www.4angels.jp

メール sdarm.shomaru@gmail.com

発行日 2020年8月1日

編集&発行 SDA 改革運動日本ミッション

〒368-0071 秩父郡横瀬町芦ヶ久保 1607-1

Illustrations: Getty Image on Front page; Sermon View
on page 44

Printed in Japan

同じ感化力を及ぼすであろうか？

イエスは事実上、次のように言っておられた。「あなたの助けとなるのは論争ではない。魂に光をもたらすのは議論ではない。あなたは新しい心を持たなければならない。さもなければ天の御国を識別することはできない。あなたを正しい地位に置くのは、もっと大きな証拠なのではなく、新しい目的、新しい行動の源泉である。あなたはもう一度生まれなければならない。この変化が行われ、すべてが新しくされるまでは、示されうる最も強力な証拠も、役に立たない。欠乏はあなた自身の心のうちにある。すべてのものが変えられなければならない。さもなければ、あなたは神の国を見ることができない。」

これはニコデモにとって非常に屈辱的な言葉であり、彼はいらだってキリストの言葉の上げ足を取った。「人は年をとってから生れることが、どうしてできますか」。彼はキリストの言葉の意味を識別するほどの霊的な思いを持っていなかった。しかし、救い主は議論に議論をもって応じられなかった。厳粛に静かな威厳をもって手を挙げ、さらに大きな保証をもってさらに真理をまっすぐに語られた。…

真理の光線がいくらか役人の思いに射し込んでいた。キリストの言葉は彼の思いを畏敬の念で満たしたので、次の質問へとうながされた。「どうして、そんなことがあり得ましようか」。深い熱心さをもって、イエスは答えられた、…このお方のみ言葉はニコデモに次の教訓を与えた、すなわち、あなたは真理の率直な言葉にいらだちを感じ、皮肉にふける代わりに、自分自身についてもっと謙遜な意見をもつべきである。自分が霊的な無知なのだから。しかし、キリストの言葉は非常に厳粛な威厳をもって語られ、まなざしも声も自分に対する非常に真剣な愛を表現していたため、ニコデモは自分の屈辱的な立場を自覚しても怒らなかった。…

このニコデモへの教訓は今日イスラエルの役人のように責任のある立場にいる人々、その声がしばしば会議の中で聞かれ、ニコデモの持っていたのと同じ精神の証拠を示している人々に、大いに当てはまるものとして提示する。この役人の長への教訓は、彼らの心と生活に同じ感化力を及ぼすであろうか？ニコデモはこの会見の結果、改心した。キリストの言葉は、会議の長たち、教会の長老たち、そしてわたしたちの施設の役員の地位を占めている人々に語られている。「よくよくあなたに言うておく。だれでも新しく生れなければ、神の国を見ることができない」。「わたしは新しい心をあなたがたに与える」。

もしあなたが自分の心を日々御霊にかたちづくっていただき、形成していただくなら、そのとき、神の御国の性質を知覚する神聖な洞察力を得ようになる。ニコデモはキリストの教訓を受けて、真の信徒となった。…（牧師への証 367-369）

第18課 死後に何が起こるか(Ⅱ)

人々は死んで意識があるだろうか

人間の霊は歩き回ったり、あるいは刑罰もしくは祝福の場所へ行ったりするのでしょうか？主は、この点について明確に述べておられます。「生きている者は死ぬべき事を知っている。しかし死者は何事をも知らない、また、もはや報いを受けることもない。その記憶に残る事がらさても、ついに忘れられる。その愛も、憎しみも、ねたみも、すでに消えうせて、彼らはもはや日の下に行われるすべての事に、永久にかかわることがない」(伝道の書 9:5,6)。

ここに書かれているように、死者は何も知りません。彼らの命の息は神へ戻り、彼らの体は墓の中で分解されます。「すべてあなたの手のなしうする事は、力をつくしてなせ。あなたの行く陰府には、わざも、計略も、知識も、知恵もないからである」(伝道の書 9:10)。

ヨブは、墓の中における人間の状態について次のように述べています。「彼の子らは尊くなっても、彼はそれを知らない、卑しくなっても、それを悟らない」(ヨブ 14:21)。

それでは、死とは人の終わりでしょうか？そうではありません。神はわたしたちを希望のないままにしておかれません。墓の後に、別の存在の状態があるはずです。なぜなら、死は「眠り」と呼ばれているからです。眠りとは、人が再び目覚めて意識が戻る状態のことです。「人は伏して寝、また起きず、天のつぎるまで、目ざめず、その眠りからさまされない。どうぞ、わたしを陰府にかくし、あなたの怒りのやむまで、潜ませ、わたしのために時を定めて、わたしを覚えてください。人がもし死ねば、また生きるでしょうか。わたしはわが服役の諸日の間、わが解放の来るまで待つでしょう。あなたがご呼びになるとき、わたしは答えるでしょう。あなたはみ手のわざを顧みられるでしょう」(ヨブ 14:12-15)。

イエスは、ご自分の友ラザロが4日間死んでいたときに、死を「眠り」と呼ばれました。「…彼らに言われた、『わたしたちの友ラザロが眠っている。わたしは彼を起しに行く』。すると弟子たちは言った、『主よ、眠っているのですしたら、助かるでしょう』。イエスはラザロが死んだことを言われたのであるが、弟子たちは、眠って休んでいることをさして言われたのだと思った。するとイエスは、あからさまに彼らに言われた、『ラザロは死んだのだ』」(ヨハネ 11:11-14)。

神のご計画は、目覚める日が来るということです。「また地のちりの中に眠って

いる者のうち、多くの者は目をさますでしょう。そのうち永遠の生命にいたる者もあり、また恥と、限りなき恥辱をうける者もあるでしょう」(ダニエル 12:2)。

墓の中にいる人々は、いつ目をさますのか？

「兄弟たちよ。眠っている人々については、無知でいてもらいたくない。望みを持たない外の人々のように、あなたがたが悲しむことのないためである。わたしたちが信じているように、イエスが死んで復活されたからには、同様に神はイエスにあつて眠っている人々をも、イエスと一緒に導き出して下さるであろう。わたしたちは主の言葉によって言うが、生きながらえて主の来臨の時まで残るわたしたちが、眠った人々より先になることは、決してないであろう。すなわち、主ご自身が天使のかしらの声と神のラッパの鳴り響くうちに、合図の声で、天から下ってこられる。その時、キリストにあつて死んだ人々が、まず最初によみがえり」(テサロニケ第一 4:13-16)。

そうです、親愛なる友人がた、死は、神の子らを永遠に捕らえておくことはできません。ちょうどイエスが死んで、死人の中からよみがえられたように、キリストは再臨の時に、自分の罪を許していただき、ご自分を信じて死んだ人々をよみがえらせます。

ヨブは、この喜ばしい事柄を、次のような明確な言葉で表現しました。「わたしは知る、わたしをあがなう者は生きておられる、後の日に彼は必ず地の上に立たれる。わたしの皮がこのように滅ぼされたのち、なお、わたしは自分の肉のうちに神を見るであろう。しかもわたしの味方として見るであろう。わたしの目が見るのであって、他の者ではない。わたしのうちにわたしの手綱が消滅しても」(ヨブ 19:25-27 欽定訳)。

神は、わたしたちのすべての部分をご存じです。わたしたちの頭の毛でさえ、数えられています(マタイ 10:30)。「わたしが隠れた所で造られ、地の深い所でつづり合わされたとき、わたしの骨はあなたに隠れることがなかった。あなたの目は、まだできあがらないわたしのからだを見られた。わたしのためにつくられたわがよわいの日のまだ一日もなかったとき、その日はことごとくあなたの書にしろされた」(詩篇 139:15,16)。

わたしたちの創造主は、わたしたちの物質そのものを良くご存じです。このお方は、各個人について正確な記録を持っておられます。そのため、このお方は人が死んだ瞬間の状態の通り、正確に再創造することがおできになります。このお方には、わたしたちの方程式があるのです！

すべての人が、死と復活の対象

「すなわち、すべての人は罪を犯したため、神の栄光を受けられなくなってお

り」(ローマ 3:23)。わたしたちは皆、死の宣告下にあります。「罪を犯す魂は死ぬ。子は父の悪を負わない。父は子の悪を負わない。義人の義はその人に帰し、悪人の悪はその人に帰する。」(エゼキエル 18:20)。しかし、これは最初の死であり、眠りという死です。

第5課で、どのようにキリスト、すなわち神の御子は、わたしたちが生きられるように、わたしたちに代わって死ぬことを望まれたかを学びました。そのため、永遠の命とは、自分の罪のために十字架上で支払われたキリストの犠牲を信仰によって受け入れる人々に対する神の賜物です。「罪の支払う報酬は死である。しかし神の賜物は、わたしたちの主キリスト・イエスにおける永遠のいのちである」(ローマ 6:23)。

不死とは、神だけの性質です。「もろもろの王の王、もろもろの主の主…ただひとり不死を保ち…」(テモテ第一 6:15,16)。

体は滅びても、わたしたちには義人が永遠の命へと復活する約束と希望があります。「神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである」(ヨハネ 3:16)。

辞書によると、「滅びる」とは、「破壊されること、または命を失う」ということ、つまり、「存在しなくなる」ということである。良い人であれ悪い人であれ、死んだ人は皆、いつかよみがえらされるのです。

「このことを驚くには及ばない。墓の中にいる者たちがみな神の子の声を聞き、善をおこなった人々は、生命を受けるためによみがえり、悪をおこなった人々は、さばきを受けるためによみがえって、それぞれ出てくる時が来るであろう」(ヨハネ 5:28,29)。

悪人は、自分たちの罪の生涯の報いを受けるためによみがえらされます。この報いは「第二の死」と呼ばれています(黙示録 20:14; 21:8)。

ヨハネ 3章 16節によりますと、義人は永遠の命を受けますが、「悪しき者は滅び…」ます(詩篇 37:20)。

闘争と勇気

Conflict and Courage



9月

9月1日

神の支配のもとで

「ダニエルは言った、『神のみ名は永遠より永遠に至るまでほむべきかな、知恵と権能とは神のものである。神は時と季節とを変じ、王を廃し、王を立て、知者に知恵を与え、賢者に知識を授けられる。』」(ダニエル 2:20, 21)

世界最強の帝国の王の前に、沈着冷静に立つヘブルの捕虜を見よ。彼は口を開くとまず、自分に栄誉を帰すのではなく、神をすべての知恵の源として高めたのである。「あなたはわたしが見た夢と、その解き明かしとをわたしに知らせることができるのか」という王の切なる問いに彼は答えた。「王が求められる秘密は、知者、法術士、博士、占い師など、これを王に示すことはできません。しかし秘密をあらわすひとりの神が天におられます。彼は後の日に起るべき事を、ネブカデネザル王に知らされたのです。……

人類の歴史の記録の中では、世界の諸国民の発展や諸帝国の興亡は、人間の意志や勇氣に左右されているかのようにみえる。いろいろな事件の形成は、その大部分が人間の能力や野心やあるいは気まぐれによってきまるかのようにみえる。しかし神のみ言葉である聖書の中には幕が開かれていて、われわれはそこに、人間の利害や権力や欲望の一切の勝ち負けの上に、また背後に、あるいはそれを通して、あわれみに満ちた神の摂理が、黙々と忍耐づよくご自身の目的を達成するために働いているのを見るのである。……

神の言葉の研究者は、諸国の歴史の中に、神の預言が文字通り成就しているのを見ることができる。バビロンはその繁栄の時に、支配者たちが、神を離れて独自の力で立つと思い、彼らの王国の栄光を人間の業績に帰したために、ついに崩壊し去ったのである。メド・ペルシャの時代も、神の律法が足の下に踏みにじられたために、天の神の怒りをこうむった。大多数の人々の心に、神を恐れる気持ちがなくなった。罪惡と神への不敬と腐敗が地にみなぎった。その後続いて起こった王国は、なおさらはなはだしい墮落と腐敗に陥った。彼らの道徳的価値は、ますます低下した。地上のすべての支配者の行使する権力は、天の神から与えられるものである。こうして与えられた権力の行使いかんにより、その繁栄か否かがかかっているのである。……

「王を廃し、王を立て」る神の力のあらわれの中にこれらの原則が働いていることを認めることこそが、歴史の原理を理解することである。(国と指導者下巻 105-111)

バビロンの指導的人物

「しかし秘密をあらわすひとりの神が天におられます。彼は後の日に起るべき事を、ネブカデネザル王に知らされたのです。あなたの夢と、あなたが床にあつて見た脳中の幻はこれです。」(ダニエル 2:28)

バビロン王国の知者たちが、王の思いから消えてしまった夢を述べることも解き明かすこともできなかったのも、彼らをみな殺せという布告がなされた時、ダニエルは主に助けを求めた。ネブカデネザルは夢の解き明かしだけではなく、そのものを語るよう要求したのであった。……知者たちは、王の要求は……人間に要求できることを越えていると宣言した。王は怒って、大きな権力を持ち、なおかつ激情を制御できないすべての人のように行動した。この人々はみな死刑にすべきであると決定したのである。そしてダニエルと彼の同僚も知者と見なされていたので、彼らも同じ運命をたどらなければならなかった。(神の息子、娘たち7月28日)

ダニエルはイエス、キリストの霊を吹き込まれていたのでバビロンの知者が滅ぼされるべきではないと嘆願した。キリストに従う者は、神の被造物を悲しませたり、苦しませたりすることを喜ぶサタンの属性を持つてはいない。彼らは「わたしがきたのは失われた者を探し出して、救うためである。わたしがきたのは義人を招くためではなく、罪人を招いて悔い改めさせるためである」と仰せになった自分たちの主人の精神を持っている。ダニエルが、教会内で、今日、簡単に燃え上がる宗教的な熱心さを持っており、自分たちの指示した計画に従って、神に仕えない人々を、その熱心さによって苦しみ圧迫し破滅させようとする人々のようであったなら、彼はアリオクに、「知者であると主張しているこの人々は王を欺いています。彼らには自分たちが主張している知識はありませんから、滅ぼされるべきです。彼らは天の神を辱め、偶像に仕えているので、彼らの生涯はどのような方法であっても神に栄誉を帰すことはありません。彼らを死なせましょう。しかしわたしを王の前に連れて行って下されば、王に解き明かしを致します」と言ったであろう。

心を変える神の恵みは、その僕の内にあらわされ、ダニエルは、後になって、こっそりと不正な手段で自分の生命を取ろうとしたその人々のためにこれ以上ないほど熱心に嘆願したのである。この人々は、ダニエルが王や貴族の好意を得、バビロンにおける最高位の人として名誉を授けられたので、彼を妬んだのであった。(手紙 90, 1894 年)

9月3日

炉の中の四人

「もしそんなことになれば、わたしたちの仕えている神は、その火の燃える炉から、わたしたちを救い出すことができます。また王よ、あなたの手から、わたしたちを救い出されます。」(ダニエル 3:17)

しかし主はご自身の者たちをお忘れにならなかった。主の証人たちが炉の中に投げ入れられたときに、救い主は彼らにご自身をあらわされた。そして自ら彼らとともに火の中を歩かれた。熱と冷気を支配される主の前にあつては、炎も焼きつくす力を失った。

王は玉座から、彼に反抗した人々が全く焼きつくされるものと思って眺めていた。しかし王の勝ち誇った気持ちは、突然一変した。側に立っていた大臣たちは、王が玉座から立ち上がってじっと燃える炎を眺めたときに、彼の顔が青ざめるのを見た。王は驚いて大臣たちにたずねた。「われわれはあの三人を縛って、火の中に投げ入れたではないか。

……しかし、わたしの見るのに四人の者がなわめなしに、火の中を歩いているが、なんの害をも受けていない。その第四の者の様子は神の子のようだ。」異教の王はどのようにして、神の子の姿を知ることができたであろうか。バビロンにおいて信任の地位についたヘブルの捕虜たちは、その生活と品性において王の前に真理をあらわした。彼らはその信仰の理由を聞かれたときに、ためらわずにそれを伝えた。彼らは簡単明瞭に義の原則を示し、彼らの周りの人々に彼らの礼拝する神のことを教えた。彼らは来たるべき贖い主キリストのことを語った。であるから王は、火の中の第四番目の姿に神のみ子を認めたのであった。……

ヘブルの勇者たちと火の燃える炉の中を歩かれたかたは、どこであつても、主に従う人々とともにおられるのである。彼の臨在が彼らを慰め支える。国が始まってからその時に至るまで、かつてなかったほどの悩みの時の最中に、神に選ばれた人々は揺らぐことなく立つのである。サタンは悪の全軍をもってしても、神の聖徒たちの最も弱い者をさへ滅ぼすことはできない。強い力をもった天使が彼らを守る。そして主は、主に信頼する者を全く救うことがおできになる「神々の神」として、彼らのためにご自身をあらわされるのである。(国と指導者下巻 117, 121)

謙遜にされたネブカデネザル

「地に住む民はすべて無き者のように思われ、天の衆群にも、地に住む民にも、彼はその意のままに事を行われる。だれも彼の手をおさえて『あなたは何をするのか』と云うる者はない。」(ダニエル 4:35)

神がネブカデネザルにお与えになった最後の夢とそれに関連した王の経験は、神のみ働きに携わっているすべての人々にとって、非常に大切な教訓を含んでいる。王は夢を見て悩まされた。それは、明らかに不幸についての預言であり、彼の知者たちは誰もそれを解き明かそうとしなかったからである。忠実なダニエルは、へつらうことなく、好意を得ようとして誤った解釈をするためでもなく、王の前に立った。バビロンの王に真実を伝えるようにという厳粛な責任が彼に負わされていた。

ネブカデネザルは天から送られたメッセージを心に留めなかった。この警告を受けて一年後、宮殿の中を歩いていた時に彼は、「この大いなるバビロンは、わたしが……建てた……のではないか」とひとりごとを言った。天におられる神は王の心を読まれ、自己満足のささやきを聞かれた。……「天から声がくだって言った、……国はあなたを離れ去った。あなたは追われて世の人を離れ、野の獣と共におり、牛のように草を食い、こうして七つの時を経て、ついにあなたは、いと高き者が人間の国を治めて、自分の意のままにこれを人に与えられることを知るに至るだろう」この言葉は、ただちにネブカデネザルに成就した。(ビュー・アポド・ヘルド 1896年9月8日)

ネブカデネザルは七年の間、全国民の驚きの的であった。彼は七年の間、全世界の前で屈辱をこうむった。それから彼の理性が回復されて、彼は心を低くして天の神を見上げ、この懲罰が神の手によるものであることを認めた。彼は公の布告の中で自分の罪を認め、彼を回復させて下さった神の大きなあわれみを認めた。……

世界最大の王国が神をほめたたえるようになるという、神のみこころは達成されたのである。ネブカデネザルが、神のあわれみとつくしみ深さと権力とを認めたこの公の布告は、聖書の歴史に記されている彼の生涯の最後の行為となった。(国と指導者下巻 127, 129)

9月5日

神の使者ダニエル

「そこで総監および総督らは、国事についてダニエルを訴えるべき口実を得ようとしたが、訴えるべきなんの口実も、なんのとがをも見いだすことができなかった。それは彼が忠信な人であって、その身になんのあやまちも、とがも見いだされなかったからである。」(ダニエル 6:4)

地上の最大の王国の総理大臣であったダニエルは、それと同時に神の預言者であり、天から靈感の光を受けたのである。彼はわれわれと同じ情の人であるが、靈感の筆は彼に誤りはなかったと記している。彼の事業の取り扱い、敵がどんなに厳密に調査しても、何ひとつ落ち度が見つからなかったのである。ダニエルは、実業家が悔い改めて献身し、その動機が神の前に正しくあるときに、どのような者になり得るかという模範である。…

ダニエルは揺らぐことのない忠誠を神につくし、断固として自己を制し、その気高い威厳と不動の誠実とによって、まだ若かったのに彼を監督する任務を帯びた異教の役人の、「恵みとあわれみ」とを受けたのである。……彼は速やかに、バビロン王国の総理大臣の地位に上った。次々と王たちの治世が続き、国家が崩壊して別の世界帝国が建設される時代にあつて、彼は知恵と政治的手腕を持ち、その機転、その丁重さ、その純粋な親切心、原則に対する忠実さなどは実に完璧であったので、彼の敵でさえも「訴えるべきなんの口実も、なんのとがをも見いだすことができなかった」と告白しないわけにはいかなかった。ダニエルは国事の責任と、世界を支配する王国の機密を託されて人間の栄誉を受けたが、神からは神の使者として栄誉を賜わり、来たるべき時代の秘密について多くの啓示を受けたのである。ダニエル書七章から十二章に彼が記した驚くべき預言は、預言者ダニエル自身でさえ十分に理解することができなかった。しかし彼は、その生涯の働きを終わる前に祝福された確証が与えられた。「定められた日の終りに立って」、すなわちこの世界歴史の終局において、彼はふたたび立つてその分を受けるのであった。……

われわれはダニエルと彼の仲間たちのように、真実で気高く、永続するもののために生きることであろう。そしてわれわれは、われわれの主、救い主の永遠に続く祝福された王国の原則を現世において学び、彼がおいでになる時には、彼とともにその国に入って、それを自分のものとする準備が整うのである。(国と指導者下巻 155-158)

神は御使を送られた

「そこで王は命令を下したので、ダニエルは引き出されて、ししの穴に投げ入れられた。王はダニエルに言った、『どうか、あなたの常に仕える神が、あなたを救われるように』。」(ダニエル 6:16)

ダニエルは高い地位にいた。告発する悪天使の群れは総監や総督の妬みや嫉妬心を掻き立てた。……これらのサタンの代理人たちは、神に対するダニエルの忠誠を彼の破滅の原因にしようと画策した。……

王はダニエルに対して企てられた巧妙な危害について何にも知らなかった。王の法令について完全に知ったうえで、なおかつダニエルは「窓の開かれた」ところで神のみ前にひざまづくのである。神への嘆願はなにも増して大切なものであるから、これを断念するよりは自分の生命を犠牲にしたほうがよいと彼は考える。(教会への証 1 巻 295, 296)

神はダニエルの敵が、彼をししの穴に投げ入れることを阻止されなかった。神は悪天使と悪人たちが、ここで彼らの目的を達するのをお許しになった。しかしそれは、神のしもべの救出をさらに著しいものにし、真理と義の敵の敗北を、さらに完璧なものにするためであった。……御都合主義ではなくて、正義を行うことを選んだこのひとりの人の勇氣によって、サタンは敗北し、神のみ名は高められ、崇められるのであった。

翌朝早く、ダリヨスはししの穴へ急いで行って、「悲しげな声をあげて呼ばわり」、「生ける神のしもべダニエルよ、あなたが常に仕えている神はあなたを救って、ししの害を免れさせることができたか」と言った。

預言者ダニエルの声は答えた。「王よ、どうか、とこしえに生きながらえられますように。わたしの神はその使をおくって、ししの口を閉ざされたので、ししはわたしを害しませんでした。……」

ししの穴に入れられたダニエルは、国家の大臣たちの長として、また至高者の預言者として、王の前に立ったダニエルと同じであった。神を信頼している人は、最大の試練の時においても、神と人間からの光と恵みが降り注ぐ繁栄の時と同様なのである。…

肉体的危害や苦難から救うためにそば近くにある力は、またさらに大いなる悪から救うためにそば近くにあつて、神のしもべに、どんな状況のもとにあつてもその誠実さを堅持する力を与えて、神の恵みによって勝利することを可能にするのである。(国と指導者下巻 153-155)

9月7日

重荷を分けあう

「それでわたしは、わが顔を主なる神に向け、断食をなし、荒布を着、灰をかぶって祈り、かつ願ひ求めた。」(ダニエル 9:3)

ダニエルはイスラエルのためになお心を悩まし、改めてエレミヤの預言を研究した。それは非常にはっきりしたものであった。彼は書物に記されたこれらの明白な記録によって、「主が預言者エレミヤに臨んで告げられたその言葉により、エルサレムの荒廃の終るまでに経ねばならぬ年の数は七十年であることを」悟った。

ダニエルは確かな預言の言葉に基づいた信仰をもって、これらの約束が速やかに成就されるように主に嘆願した。ダニエルは神の誉れが保たれるように嘆願した。彼はその訴えのなかで、神のみこころに従わなかった人々と自分とを全く同じ状態におき、彼らの罪を自分自身の罪として告白した。(国と指導者下巻 163)

ダニエルの唇から何という祈りが出てきたことだろう。その祈りはなんと魂のへりくだりをあらわしていることだろう。神のみ前に上っていったその言葉には、天の火のぬくもりが認められた。天はその使者をダニエルに送ることによって彼の祈りに応えた。今日においても、このように差し出される祈りは神に聞かれる。「義人の祈りは大いに力があり、効果のあるものである。」古代においては祈りが捧げられる時、天から火が下り、祭壇の上の犠牲を焼き尽くした。そのように私たちの祈りにも天からの火が私たちの魂の内に下る。聖霊の光と力が私たちのものとなる。……

わたしたちもダニエルと同じように神に呼び求める必要が大にあるのではないだろうか。自分がこの地上歴史の一番最後の時代に生きていると信じる人々にわたしはお話する。わたしたちの教会、学校、組織のための重荷をあなた自身の魂に負うようにと嘆願する。ダニエルの祈りを聞かれた神は、わたしたちが悔い改めて神のみもとに来る時、わたしたちの祈りをも聞かれる。わたしたちの必要は急を要しており、わたしたちの困難は非常に大きいので、目的に対して同じ熱心さを持つ必要がある。そして信仰によって、自分の重荷を、重荷を負って下さる偉大なお方に預ける必要があるのである。ダニエルが祈った時代のように、今の時代も心を深く動かされる必要がある。(レ・ビュー・ア・ド・ヘラルド 1897年2月9日)

一連の出来事を支配される神のみ手

「またクロスについては、『彼はわが牧者、わが目的をことごとくなし遂げる』と
言い、エルサレムについては、『ふたたび建てられる』と言い、神殿については、『あ
なたの基がすえられる』と言う。』（イザヤ 44:28）

主は資源を持っておられ、そのみ手は一連の出来事を支配される。神殿の再
建の時が来ると、ご自身に関する預言を理解し、ユダヤ人に自由を得させるため
の代理人として、クロスを動かされるのであった。（SDA バイブルコメント [E・G・ホワイト・コメント] 4 巻 1175）

神はダニエルがししの穴から救い出されたことを、クロス大王の心に好感を抱
かせるためにお用いになった。……王が自分の生まれる百年以上も前に預言され
た、バビロン占領の模様についての言葉を見たとき……宇宙の王が彼に言われた
言葉を読んだときに……彼は深く感動した。そして自分に命じられた任務を遂行
しようと決心したのである。彼はユダヤの捕囚たちに、自由を与えようとした。そ
して主の神殿の再建を援助しようとしたのである。クロスは「全国に布告を発し」、
ヘブルびとたちの帰還と、神殿再建の援助をすることを発布した。……

この布告は王の領地の最も遠方の地にまで伝えられて、各地の離散した
民の間に大きな喜びがわき起こった。多くの人々はダニエルのように預言を
研究し、神がシオンのために約束しておられた介入を祈り求めている。……
クロスはダビデ王の子孫ゼルバベル（セシバザルとも呼ばれた）に、ユダヤに帰
還する一団の人々の総督となる責任を負わせた。そして大祭司ヨシュアが彼を支
持していた。荒涼とした砂漠を通った長い旅は、無事に終わった。神の多くのあ
われみを感謝した幸福な一団の人々は、直ちに破壊されていたものの再建の仕
事に取りかかった。（国と指導者下巻 165-168）

主なる神は全能の統治者であられる。すべての王や国々は神のものであり、
その支配と統治下にある。神の資源は無限である。賢者は宣言する、「王の心は、
主の手のうちにあって、水の流れのようだ、主のみ心のままにこれを導かれる」と。
その行動が国々の運命を左右するところの人々は、「王たちに勝利を与え」るお
方によって、休むことを知らない警戒をもって見守られている（SDA バイブルコメント
[E・G・ホワイト・コメント] 4 巻 1170）

9月9日

信仰のテストである障害物

「だれが小さいことの日をいやしめたのか」(ゼカリヤ 4:10 英語訳)

ゼルバベルは主の家の再建に当たって、様々の困難をもものともせず、働いたのであった。敵は最初から、「ユダの民の手を弱らせて、その建築を妨げ」、「腕力と権力とをもって彼らをやめさせた」。しかし主は建設者たちのために手を下し、今や彼の預言者によってゼルバベルに語り、「大いなる山よ、おまえは何者か。おまえはゼルバベルの前に平地となる。……

神の民の歴史を通じて、一見越えることができないと思われた大きな困難の山が、天の神のみこころを実行しようとした者の前に、立ちはだかつたのである。このような障害物は、信仰の試練として主がお許しになったのである。われわれが四方から取り囲まれるときこそ、他のどんな時にもまぎって、神と聖霊の力に信頼すべき時である。生きた信仰を働かせるということは、霊的力が増し、揺るがぬ信頼が発達することを意味する。このようにして、人は勝ち進む強力な者となる。信仰をもって祈り求めるときに、サタンがキリスト者の道に置いた障害物は消え去ってしまう。なぜなら、天の力が彼を助けるために送られるからである。「あなたがたにできない事は、何もないであろう」。世の中では、虚飾と誇示をもつて事を始めるのがならわしである。しかし神は、小さい事の日を真理と義の輝かしい勝利の出发点となさるのである。神は時々彼らに、失望と一見失敗と思われるものを与えて、神の働き人を訓練なさるのである。彼らが困難を征服することを学ぶのが、神のみこころである。しばしば人々は、難局や障害物に当面したときに、よろめくように誘惑を受ける。しかし、もし彼らが最初に持った確信を、しっかりと終わりまで持ち続けるならば、神は彼らの道を開いてくださるのである。……ゼルバベルの勇敢な精神と揺るがぬ信仰の前に、大きな困難の山は平地となるのである。そして、基礎をすえた、「彼の手はこれを完成する」。(国と指導者下巻 199, 200)

生徒であり教師であるエズラ

「エズラは心をこめて主の律法を調べ、これを行った。」(エズラ 7:10 上旬)

エズラはアロンの家系の者であつたので、祭司としての訓練を与えられていた。それに加えて、彼は魔術士や占星術士やメド・ペルシャ国内の賢者たちの書物に精通していた。しかし彼は、自分の霊的状态に満足していなかった。彼は神と完全に一致することを熱望したのである。彼は神のみこころを実行に移す知恵を熱望したのである。……そのために彼は、預言者と王の書物の中に記された、神の民の歴史を熱心に研究するようになった。彼は聖書の歴史的部分と詩的部分とを調べ、なぜ神は、エルサレムが破壊され、神の民が異教の地に連れ去られるのを許されたのかを知ろうとした。……

……彼はシナイ山において与えられた教えと、長い荒野の放浪期間を通じて与えられた教えとを研究した。神が民を扱われる方法についてますます研究を深め、シナイにおいて与えられた律法の神聖さを理解するにつれて、エズラの心は感動した。彼は新たに徹底的改心を経験して、聖なる歴史に精通しようと決心した。それは彼がこの知識を用いて、彼の民に祝福と光をもたらすためであつた。エズラは彼の前にあると信じた働きのために、心の準備をしようと努力した。彼は熱心に神を求め、イスラエルの賢明な教師になろうとした。彼が神の支配に心と意志を従わせることを学んだときに、彼の生活に真の聖化の原則が生じた。そしてこれは、後年彼の教えを請うた青年たちだけでなく、彼に接したすべての人々に品性建設上の感化を及ぼしたのである。……エズラは神の代弁者となって、周りの人々に天を支配している原則を教えた。……メド・ペルシャの王宮の近くにあつてもエルサレムにおいても、その主な働きは教師としての仕事であつた。彼は自分が学んだ真理を他の人々に伝えたときに、その働きの能力が増大した。彼は敬神深い熱の人となった。彼は聖書の真理には、人々の日常生活を高貴にする力があることを世にあかしする証人となった。(国と指導者下巻 211, 212)

知識は行動を要求する

「エズラは……イスラエルの神、主がお授けになったモーセの律法に精通した学者であった。」(エズラ 7:6)

エズラが「心をこめて主の律法を調べ、これを行」ってから、二千年以上が過ぎ去った。しかし時の経過は、彼の敬虔な模範の影響を少しも弱らせていない。彼の献身した生涯の記録は、幾世紀を通じて多くの人々に、「主の律法を調べ、これを行」う決意を促したのである。

エズラの動機は気高く、神聖なものであった。彼のなしたことはすべて、魂に対する深い愛に動かされたものであった。故意であろうが、無知によるものであろうが、罪を犯した者に対する彼の同情と情け深さは、改革を起こそうとするすべての者にとって、実物教訓でなければならない。神のしもべは、正しい原則に関しては岩のように堅固でなければならない。それとともに、彼らは同情と忍耐をあらわさなければならない。彼らはエズラのように、すべての正しい行為の基礎である原則を説き聞かせて、罪人に生命の道を教えなければならない。……

主の律法を弱めるとか、あるいは強めるといったことはないのである。律法はこれまでどおり、今も同じである。律法は常にそれ自体が聖であって、正しくかつ善なるものであったし、今後も常にそうなのである。律法は廃止したり、変更したりできない。律法を「光栄あるものとする」、または「軽んじる」というのは、ただ人間の言葉に過ぎない。……

キリスト者は、やがて世界に、圧倒的驚きとして起ころうとしている事件の、準備をしなければならない。そして彼らは、神の言葉を忠実に研究して、その教えに生活を調和させようと努力することによって、この準備をしなければならない。永遠に関する恐るべき問題は、空想的でただ言葉と形式だけの宗教以上のものを要求している。この宗教においては、真理が除外されているのである。……

主は、今日の彼の弟子たちによって光が輝き出るように計画された。もし旧約時代の聖徒たちが、あのように輝かしい忠誠のあかしを立てたとするならば、幾世紀にわたって蓄積された光が輝いている者は、真理の力について、もっと著しいあかしを立てるべきではなかろうか。(国と指導者下巻 224-227)

わたしたちは、み言葉の知識を役立てることを、エズラの模範から学ぶべきではないだろうか。この神のしもべの人生は、わたしたちにとって、心と精神と力を尽くして主に仕えることの励ましとなるべきである。わたしたちには、各自しなければならない働きがあり、それは献身的に努力することによってのみ成し遂げられる。まず神のご要求を知り、そして実行しなければならない。そうすることによって、わたしたちは永遠の命に至らしめる実を实らせる真理の種をまくことができるのである。(SDA バイブルメンタリー [E・G・ホワイト・コメント] 3 巻 1134)

神、民の保護者

「これは、われわれがさきに王に告げて、『われわれの神の手は、神を求めるすべての者の上にやさしく下り、その威力と怒りとはすべて神を捨てる者の上に下る』と言ったので、わたしは道中の敵に対して、われわれを守るべき歩兵と騎兵とを、王に頼むことを恥じたからである。」(エズラ 8:22)

エズラは神が、ご自分の民のために大いなる働きをして下さることを信じていたので、エルサレムに帰って神の言葉の研究熱を復興し、聖なる都の再建をしている兄弟たちを助けたいという願いを、アルタクセルセスに告げたのである。エズラがイスラエルの神に完全に信頼して、神はその民を保護し養うことが十分おできになることを宣言したときに、王は深く心を動かされた。……彼の願いを許して神殿の務めのために、高価な贈り物を彼に与えたのである。王は彼をメド・ペルシャ王国の特使として、彼に広範囲にわたる権威を授けて、彼の心中の計画を達成させようとした。……

こうして離散していた民は、ふたたび故郷の地に帰る機会が与えられた。そして、イスラエルの家に対する約束は、その地を所有することに関連していた。
……

今やすべての者は出発の準備が整った。彼らは目前に、数か月にわたる旅行をひかえていた。彼らは妻子とその財産のほかに、神殿とその務めのために多額の財宝を携えていた。エズラは敵が途中で待ち伏せ、彼とその一行を襲って滅ぼそうとしていることをよく知っていた。しかし彼は、王に、兵卒たちの保護を求めなかった。……

エズラとその一行は、ここにおいて異邦人の前で、神の名を賛美する機会を認めたのである。もしイスラエルびと自身がここで、彼らの指導者であられる神に絶対的信仰をあらわすならば、生ける神の力に対する信仰が強められるのであった。そこで彼らは、神に全面的信頼をおくことにしたのである。彼らは兵卒たちの保護を求めなかった。彼らはただ神にのみ属する栄光を、人間の力に帰する理由を異邦人に与えないのであった。彼らは自分たちが神の民として、真心から神により頼んでいることに関して、異邦の友人たちの心に一点の疑惑も起こしてはならないのであった。……彼らは、彼らの前にある神の律法を守り、それに従おうと努力することによってのみ、保護されるのであった。……「そこでわれわれは断食して、このことをわれわれの神に求めたところ、神はその願いを聞きいれられた」(国と指導者下巻 212-218)

9月13日

聖なる目的

「主よ、どうぞしもべの祈……に耳を傾けてください。どうぞ、きょう、しもべを恵み、この人の目の前であわれみを得させてください。」(ネヘミヤ 1:11)

ヘブル人の捕囚のひとりであったネヘミヤは、バビロンの宮廷で栄誉ある有力な地位を占めていた。彼は王の給仕役として、自由に王の前に出ることを許されていた。……神はネヘミヤを用いて、祖先の地に在る神の民に祝福をもたらそうとご計画された。……

愛国者ネヘミヤは、選ばれた都エルサレムに試練の時が来たことを、ユダからの使者から聞いた。帰還した民は、苦難と屈辱に遭っていた。……復興事業は妨害され、神殿の務めは邪魔された。そして人々は、都の城壁がまだ大半は荒廃したままなので、常に警戒していなければならなかった。……

ネヘミヤは彼の民のために、しばしば心を注ぎ出したのであった。しかし今、彼が祈ったときに、彼の心には聖なる決意が起こった。もし王の許可が与えられ、器具と材料を手に入れるのに必要な援助が与えられるならば、ネヘミヤ自身がエルサレムの城壁の再建事業に着手し、イスラエルの国家的勢力を回復しようと決心した。……

ネヘミヤは四か月間、王に願いを申し出る絶好の機会を待った。…

彼は王からの援助を必要とする、聖なる任務を成し遂げなければならなかった。そして彼は、王の承諾を得てその援助を受けることは、彼がこの事をいかに王に申し上げるかに、大いにかかわりがあることを自覚した。「わたしは天の神に祈る」と彼は言った(ネヘミヤ記 2:4)。ネヘミヤはその短い祈りによって王の王のみ前に出て、川の水を変えるように人の心を変えることのできる力を、自分の味方にしたのである。

緊急の時にネヘミヤが祈ったように祈ることは、他の形式の祈りを行うことが不可能な場合に、キリスト者が用いることができる方法である。……突然困難や危機が訪れた場合には、彼を信じる忠実な者の呼ぶ声に答えて、いつでも来て助けるとみずから約束なさったかたの助けを呼び求めればよいのである。人はどんな環境、どんな状態のもとにあっても、悲しみと労苦に圧倒され、あるいは誘惑に激しく襲われるときに、契約を守られる神の尽きない愛と力に、確証と支持と援助を見いだすことができるのである。(国と指導者下巻 230-234)

行動の人

「王がわたしをつかわすことをよしとされたので、わたしは期間を定めて王に申しあげた。」(ネヘミヤ 2:6 下句)

ネヘミヤは神の助けを嘆願していた間、エルサレム再建という自分の目的を成し遂げるにあたってこれ以上責任を負ったり、心配をしないという気持ちで、手をこまねいてはいなかった。見事なまでの用心深さと深慮のもとに、この事業の成功を確実なものにするために必要な準備をすべて進めていたのである。……

この聖なる人の模範が神のすべての民にとって教訓とならなければならない。それは民が信仰によってただ祈るだけではなく、勤勉にまた忠誠を尽くして働かなければならないからである。用心深さや深慮また骨折りは信仰とはほとんど関係がないと考えるために、私たちはどれほど多くの困難に遭遇し、また私たちの為であるみ摂理の働きを妨げていることであろうか。これはゆゆしい過ちである。自分を神のためのもっと有能な働き人にするあらゆる能力を培い訓練するのは私たちの義務である。ネヘミヤの時代と同様、注意深い配慮とよく練った計画が聖なる事業の成功には不可欠である。……祈りの人は行動の人でなければならない。備えができており、快く行く人々は働きの方法と資力を見つける。ネヘミヤは確実でないことには頼らなかった。彼に不足していた資力を、彼は与えることのできる人々を請い求めた。

主はまだご自分の民のために王や支配者の心を動かしておられる。主の為に働く者は、主が、ご自分のみ業の進展のために提供するようにと人々に働きかけておられるその助けを利用すべきである。……この人々は神のみ業に共鳴せず、キリストを信じる信仰もなく、そのみ言葉についての知識もないかもしれないが、その人々の贈り物をそのことのために拒んではならない。……

私たちがこの世にいるかぎり、神のみ霊が人の子らと共に努力しているかぎり、私たちは彼らに分け与えるのと同様彼らの好意も受けるべきである。私たちは聖書にあらわされているように、真理の光を世に与えなければならない。そして神がご自分のみ業のために与えるようにとその心を動かされる世の人々から、受けることもしなければならないのである。……ああ、クリスチャンが正しい原則を大切にしつつ、この世において神の王国を前進させるために天が送られたあらゆる機会を活かすことが自分たちの特権であり、義務であることにもっともっと十分に気づくとよいのだが。(ザンウォッチマン 1904 年 3 月 15 日)

9月15日

建てようではないか

「そして、わたしの神がよくわたしを助けられたことを彼らに告げ……たので、彼らは『さあ、立ち上がって築こう』と言い、奮い立って、この良きわざに着手しようとした。」(ネヘミヤ 2:18)

悲しみに満たされた心で遠方からの訪問者は、彼の愛したエルサレムの荒廃した要害をじっと眺めた。天のみ使いたちがキリストの教会の状態を見渡すのもこのようではなかろうか。エルサレムの住民のように私たちは罪惡の存在することに慣れてしまう。そしてそれらをいやす努力をしないで満足していることがよくある。しかし、神から光を与えられた者たちは、これらの罪惡をどのように見るだろうか。彼らはネヘミヤのように悲しみに満ちた心で、崩れた城壁と火で焼かれた門を見ないであろうか。(SDA バイブルコメンタリー [E・G・ホイト・コメント] 3 巻 1136)

ネヘミヤは、住民が町の城壁建設に協力するように要求する、王の任命を持っていたが、彼は権力の行使に依存しなかった。彼はその前にある大事業のためには、手の一致とともに、心の一致が必要であることを認めていたので、人々の信頼と共鳴を得ようとした。(国と指導者下巻 238,239)

今日、教会にはネヘミヤのような者たちが必要とされている。ただ祈り説教するだけの人々ではなく、祈りと説教が強く熱心な意志で支えられている人々である。……ネヘミヤの努力に伴う成功は、祈り、信仰、賢明さ、精力的な行動によることを示す。……指導者によって示される精神は、大体において、人々に反映されるだろう。もし、今の時代に世を試みるべき厳粛で重要な真理を信じると公言する指導者たちが、神の日に立つべき人々を備えるために燃えるような熱意をはっきり示さないならば、私たちは教会が不注意で怠慢で快楽を愛するようになることを予期せざるを得ない。(SDA バイブルコメンタリー [E・G・ホイト・コメント] 3 巻 1137)

ネヘミヤは重大事に建てられた偉大な人、改革者であった。彼は罪惡とあらゆるたぐいの反対に出会った時、新たな勇氣と熱意をかき立てられた。彼の行動力と決意は、エルサレムの人々を奮い立たせた。そして力と勇氣が、弱さと落胆にとって代った。彼の敬虔な目的、高い望み、働きに対する快活な献身は、人から人へ伝わって行った。人々は自分たちの指導者の熱意に感化された。そして各自が自分の本分において、ネヘミヤにならって、自分の隣人の手と心をもつと強くするように助けた。(同上)

参加しなかった者

「その次にテコアびとらが修理したが、その貴人たちはその主の工事に服さなかった。」(ネヘミヤ 3:5)

まず最初に、ネヘミヤの熱誠さと真剣さに心を動かされたのは、祭司たちであった。彼らは有力な地位にあったので、事業を推進するにしても妨げるにしても、大いに力があつた。そして、彼らがまずその出発に当たって直ちに協力したことは、事業の成功に少なからず貢献したのである。イスラエルの尊い人たちがつかさたちの大部分は、立派に彼らの義務を果たした。そしてこれらの忠実な人々は、神の書の中に荣誉ある記録を残している。テコアびとの尊い人々など少数の人々は、「その主の工事に服さなかった」。これらの怠惰なしもべたちは汚名を着せられ、将来のすべての世代の人々に対する警告として、語り伝えられているのである。どんな宗教運動においても、その事業が神のものであることを否定できないにもかかわらず、なお関心を示さず、援助の手を伸べることを拒む者がある。そのような人々は、天に記録があり、何の省略も何の間違いもない記録の書があつて、それに従つて審判が行われることを思い出すとよい。そこに、神に対して奉仕をする機会がおろそかにされたことがみな記されている。そこにはまた、信仰と愛の行為がことごとく、永遠に覚えられているのである。ネヘミヤが帰還して靈的影響力を与えたことに比べれば、テコアびとの貴人たちの例は、大した影響を及ぼさなかった。大抵の人々は愛国心と熱誠に燃えていた。才能と影響力をもった人々は、種々の階級の市民を組に分けて、各組の指導者はみづから、城壁の特定の部分について建設の責任を負った。そしてある人々については、「自分のへやと向かい合っている所を修理した」と記されている。工事が実際に開始されたからには、ネヘミヤの精力は弱まることはなかった。彼はたゆまず警戒しながら建設を監督し、働き人を指揮し、妨害に心を留め、緊急事態のために備えた。あの三マイルに及ぶ城壁の全地域に、彼の指導は常に行き渡っていた。彼は適切な言葉によって、恐れをいだいた者を励まし、怠惰な者を奮起させ、勤勉な者を称賛した。そして彼は常に、敵の行動を監視した。……ネヘミヤは彼が従事した種々の活動において、彼の力の源を忘れなかった。彼はすべてのものの偉大な監督であられる神を、常に見上げていた。「天の神がわれわれを恵まれる」と彼は叫んだ。そして彼の言葉はこだまして響きわたり、城壁で働いているすべての者の心を鼓舞したのである。(国と指導者下巻 240,241)

清くない同盟

「われわれの神はわれわれのために戦われます。」(ネヘミヤ 4:20 下句)

しかしエルサレムの防衛の回復を推進するのに、妨害がなかったわけではなかった。サタンは反対を引き起こし、失望させようと働いていた。……しかし、ののしりと嘲り、反対と脅しなどはただ、ますますネヘミヤの決意を固め、警戒を強化させるに過ぎないのであった。ネヘミヤはこの敵との戦いにおいて、当面しなければならぬ危険を自覚はしたが、彼の勇気はくじけなかった。「われわれは神に祈り、また日夜見張りを置いて彼らに備えた」と彼は言っている。……

ネヘミヤはそばに、ラッパを吹く者をおいた。そして城壁のあちこちに、聖なるラッパを持った祭司たちを配置した。人々は散らばって工事に携わっていたが、危険が迫るといつでも合図とともに、その場所へ急いで行くことになっていた。「このようにして、われわれは工事を進めたが、半数の者は夜明けから星の出る時まで、やりを執っていた」とネヘミヤは言っている。…

ネヘミヤと彼の仲間たちは、困難や苦役にもひるまなかった。彼らは昼も夜も、わずかに与えられた睡眠の時間においてさえ、着物をぬいだり武器を手離したりしなかった。

ネヘミヤの時代の建設者たちが、公の敵や、友人を装った者たちから受けた反対と失望は、今日、神のために働く者が経験することの象徴である。キリスト者は、敵の怒り、嘲笑、残酷さなどに苦しめられるばかりでなく、友人であり、援助者であることを誓った人々の無関心、矛盾、生ぬるさ、裏切りなどにも悩まされる。……

サタンは清められていない者をみな、彼の目的の達成のために活用する。神の事業の支持者であると称している人々の中には、神の敵と結託して、神の事業を最も恨み重なる敵の攻撃にさらす者がいる。神の働きが栄えることを望んでいる者でさえ、神の敵の中傷、自慢、威嚇などを聞いてそれを語り、半ば信じることによって、神のしもべたちの手を弱めるのである。……それらを看破して、彼らの計画をみな挫折させられる。今日信仰はネヘミヤが答えたように、「われわれの神はわれわれのために戦われます」と答えるのである。神が工事をしておられるのであるから、どんな人も、その最後の勝利を妨害することはできない。(国と指導者下巻 241-246)

貧しい者を覚えよ

「あなたの神、主が賜わる地で、もしあなたの兄弟で貧しい者がひとりでも、町の内におるならば、……彼に手を開いて、その必要とする物を貸し与え、乏しいのを補わなければならない。」(申命記 15:7,8)

バビロンから捕囚が帰還して後、たびたびユダヤ人の金持ちたちは、これらの命令と正反対のことを行った。貧者が王に税金を払うために、借金をしなければならなかったとき、金持ち金は金を貸しはしたが高い利子をとったのであった。彼らは貧者の土地を抵当に取ったので、あわれな債務者たちを次第に貧困の極に陥れた。むすこ娘を奴隷に売らなければならない者も多かった。そしてこの状態を改善する希望もなく、将来の見通しもなく、困窮は増し加わり、いつまでも欠乏と奴隷の状態が続くかに見えたのである。それにもかかわらず、彼らは恵まれた兄弟たちと同じ国民であり、同じ契約の民であった。……

ネヘミヤはこの残酷な圧迫のことを聞いたときに、彼の心は憤りに満たされた。……ネヘミヤは圧迫的搾取の習慣を打破しようとするならば、正義のために決定的立場を取らなければならないことを認めた。彼はその独特の精力と決意をもって、兄弟たちの救出に乗り出した。

圧迫者たちが金持ちであって、都の修復事業のために彼らの支持が大いに必要であるという事実は、一瞬でもネヘミヤに動揺を与えなかった。彼は尊い人々およびつかさたちを厳しく責めた。そして民の大会衆を集めて、この事に関する神の要求を彼らの前に示したのである。……この記録は重大な教訓を教えている。「金銭を愛することは、すべての悪の根である」(テモテ第一 6:10)。この世代においては、利益に対する欲望が人々の心を夢中にしている。……

われわれはみな、神の正義に負うところがあるのであるが、われわれには払うべきものが何もない。その時、神のみ子がわれわれをあわれんで、贖いの値を払って下さったのである。彼は自分の貧しさによって、われわれに表されたあわれみに対する感謝の、真実さを証明することができる。(国と指導者下巻 248-253)

9月19日

「下って行くことはできない」

「わたしは大いなる工事をしているから下って行くことはできない。どうしてこの工事をさしおいて、あなたがたの所へ下って行き、その間、工事をやめることができようか。」(ネヘミヤ 6:3)

ネヘミヤは、復興者として喜んで主と協力する心があったので神に選ばれた。……彼は、悪い原則が行われるのを見た時、傍観者として放置しなかった。沈黙によって暗黙の承諾を与えなかった。彼は、彼が悪い側に立っているという間違った結論を人々が持つままにしなかった。彼は正義のために堅固で屈しない明確な態度を打ち出した。(SDA バイブル メンタリ- [E・G・ホイト・コメント] 3 巻 1135)

神のしもべたちを誘って、サタンの手下たちと同盟を結ばせるために、暗黒の君が考え出すあらゆる策略が用いられる。……しかし彼らは、ネヘミヤのように断固として、「わたしは大いなる工事をしているから下って行くことはできない」と答えなければならない。神の働き人たちは安心してその働きを続け、彼らを傷つけようとして行われる悪意の中傷を、その働きによって反論すればよいのである。彼らはエルサレムの城壁の建設者たちのように、威嚇や嘲笑や虚偽などによって、働きから引き離されることを拒否しなければならない。……

終末が近づくにつれて、サタンの誘惑はますます強力に神の働き人を襲うことであろう。サタンは「城壁を築く」者を嘲りののしるために、人間の手下を用いるであろう。しかし、もし建設者たちが、敵の攻撃に立ち向かうために下りて来たならば、それはただ工事を遅らせるに過ぎない。彼らは敵のしようとしていることを挫折させなければならない。しかし彼らを仕事から引き離すことは、何一つ許してはならなかった。真理は誤りよりも強い。そして正義は悪に勝利するのである。……

ネヘミヤの敵が、彼を自分たちの手の中に入れることができなかったのは、神の働きに対するネヘミヤの固い献身と、それと同様に固い神への信頼によるものであった。怠惰な人はやすやすと誘惑に陥る。しかし高尚な目標と熱烈な決心をもった人に、悪は足場を見つけることができない。……

神は、われわれ人間の力ではどうにもならない、あらゆる緊急事態に対する助けを準備しておられる。神はあらゆる苦境の助けに聖霊を与えて、われわれの希望と確信を強化し、われわれの知性に光を与え、心を純潔にして下さるのである。彼は機会を与えて、働く道を開かれる。もし神の民が、神の摂理の指示するところを見守り、神と協力する準備をしているならば、彼らは大いなる結果を見ることであろう。(国と指導者下巻 259, 261)

建設、修復、回復

「あなたの子らは久しく荒れすたれたる所を興し、あなたは代々やぶれた基を立て、人はあなたを『破れを繕う者』と呼び、『市街を繕って住むべき所となす者』と呼ぶようになる。」(イザヤ 58:12)

今日推進されるべき改革の働きにおいて、エズラやネヘミヤのように、罪の軽減も、言い訳もせず、恐れずに神の栄誉を擁護する人々が必要である。この働きの重責を担う人々は、悪が行われる時に沈黙したり、偽りの慈善という衣で、罪惡を覆ったりはしないのである。彼らは神が公平なかたであることを思い出し、数名を厳格に処罰することは、多くの人々を救うことを思い出す。そしてまた彼らは、悪を譴責する者は、常にキリストの精神をあらわすべきであることを忘れないのである。

エズラとネヘミヤはその仕事を行ったときに、神の前にへりくだって自分たちの罪と民の罪を告白し、自分たちが罪を犯した者であるかのように赦しを求めた。……ネヘミヤは祭司ではなかった。彼は預言者でもなかった。彼は大きな称号を求めなかった。彼は大切な時に立てられた改革者であった。人々を神との正しい関係に引きもどすことが、彼の目的であった。彼は大きな目的に心を動かされて、彼の存在の総力をその達成のために費やしたのである。……彼は罪惡と正義に対する反対に当面したとき断固たる態度をとったので、人々は奮い立って、新しい熱心と勇気をもって働いたのである。……

ゼルバベル、エズラ、ネヘミヤの指導のもとに、帰還した捕囚たちが行った回復と改革の働きは、この地上歴史の最後の時代に行われるべき、靈的回復の働きの情景を示している。……神の残りの民は改革者として世の前に立ち、神の律法がすべての永続的改革の基礎であって、第四条の安息日は創造の記念であり、常に神の力を思い起こさせるものであることを、示さなければならない彼らは明白な言葉で、十誡のすべての戒めに服従する必要を示さなければならない。彼らはキリストの愛に動かされて、キリストと共に力を合わせて、荒れすたれた所を復興しなければならない。彼らは、破れを繕う者、市街を繕って住むべき所となす者、とならなければならないのである。(国と指導者下巻 275-278)

9月21日

神のみ前に大いなる者

「彼は主のみまえに大いなる者となり、ぶどう酒や強い酒をいっさい飲まず、母の胎内にいる時からすでに聖霊に満たされて」いる。(ルカ 1:15)

天に記録されているりっぱな人々の中でバプテスマのヨハネよりも大いなる人はなかったと救い主は言われた。彼にゆだねられた働きには体力と忍耐力が必要であったばかりでなく、最もすぐれた頭脳と霊をも必要とした。この働きの準備として正しい体育が非常に重要であったため、天の最高の天使がその子供の両親に指示する言葉を携えてつかわされたほどであった。(ミニストリー・オブ・ヒーリング 349)

ヨハネが有能な働き人として神から命じられた働きを遂行するのにふさわしい品性を形成するよう、彼らは、両親として忠実に神と協力しなければならなかった。ヨハネは……年老いてからの子供であり、奇跡的に与えられた子供であったため、両親は、ヨハネには特別な働きが神から与えられているのだから、神が彼を特別に保護してくださるだろうと、考えることもできた。しかし、この親たちはそのようなには考えなかった。彼らは、子供が、都会生活の誘惑にさらされることがないように、そしてまた、彼らが親として与える助言や指導からそれるような気持ちにさせられることがないように、田舎の静かな所に移った。(家庭の教育 8)

ヨハネは、荒野ではよりたやすく自己を否定し、食欲を制御し、自然の法則に従った単純な衣服を身につけることができた。荒野には彼の思いを冥想や祈りから引き離すものが何もなかった。ヨハネはできる限りサタンの入ってこようとする道をどれも閉ざしたが、それでもサタンは彼に近づいた。しかしヨハネの生活習慣は非常に純潔であり、自然の法則に従っていたので、敵に気づくことができ、敵に抵抗するために堅固な精神と決意に満ちた品性を持つことができた。

自然の書が、様々な教えにみちた無尽蔵の宝庫としてヨハネの前に開かれていた。ヨハネは神の是認を求め、聖霊が彼に宿って、悔い改めて、もっと気高い生涯を送るようにと人々に呼びかけるという偉大な働きをするため、ヨハネの心に燃えるような熱心さをかき立てた。ヨハネは人里離れた生活による欠乏と苦難の日々によって、自分の体力と精神力をすべて十分に制御し、それによって、30年間自分を取り囲んでいた荒野の岩々や山々のように、周囲の状況によって動かされることなく人々の中に立つことのできる準備をしていた。(霊の賜物 2 巻 47)

エリヤの精神

「彼はエリヤの霊と力とをもって、みまえに先立って行き、父の心を子に向けさせ、逆らう者に義人の思いを持たせて、整えられた民を主に備えるであろう。」(ルカ 1:17)

神はザカリヤの子を尊い働き、人間にゆだねられた最高の働きに召されたのであった。……

ヨハネは人々に神の光を伝えるためにエホバの使者として出て行くのであった。彼は人々の考えに新しい方向を与えねばならない。彼は人々に神のご要求の神聖なことと、神の完全な義の必要とを印象づけねばならない。このような使者は聖なる者でなければならない。彼は神のみたまの内住する宮とならねばならない。この使命を達成するために、彼は健全な肉体と知的霊的な力を持たねばならない。そこで彼は食欲と情欲とを抑制する必要がある。彼は人々の中であって、荒野の岩や山のように、周囲の環境に動かされることのないように、自分のすべての力を支配することができなければならない。バプテスマのヨハネの時代には、富に対する強い欲望とぜいたくと見せびらかしを愛する思いが一般にひろがっていた。官能的な享楽や飲み食いによって、肉体の病氣と墮落が生じ、霊的な知覚はにぶり、罪に対する感覚が低下していた。ヨハネは改革者として立つのであった。彼は節制の生活と質素な衣服とによって、当時の放縦を責めるのであった。だから天のみ座からの天使によって、ヨハネの両親に、さしず、すなわち節制についての教訓が与えられた。……

彼は、キリストの初臨に道を備えたことにおいて、主の再臨に民を備えさせる人々を代表していた。世は放縦に陥っている。誤謬と作り話があふれている。魂を滅ぼそうとするサタンのがたがふえている。「神をおそれて全く清く」になりたい人はみな節制と自制について教訓を学ばねばならない。食欲と情欲はもっと高い知能に服従させられねばならない。この自己訓練は、われわれに神のみことばの聖なる真理を理解し実行する力を与えてくれる知能の力と霊的な洞察力とによって欠くことのできないものである。この理由から、節制はキリスト再臨に備える働きの一部である。(各時代の希望上巻 99-101)

9月23日

率直なメッセージ

「イスラエルよ、あなたの神に会う備えをせよ。」(アモス 4:12 下句)

荒野の生活で、バプテスマのヨハネは神について教えを受け、自然の中で神の啓示を研究した。神のみ霊の導きの下に、彼は預言者の巻物を研究した。昼となく夜となくキリストがヨハネの研究対象、瞑想の対象であり、思いと心と魂はその栄光に満ちた幻に満たされた。ヨハネは王の麗しさをながめて、自分を忘れた。彼は聖潔であるお方を見つめて、自分が無能力で無価値なことを知った。彼が宣言すべきことは神のメッセージであり、彼は神の力と義のうちに立たなければならなかった。彼は神を仰ぎ見ていたので、人をおそれることなく、天の使者として出て行く用意ができた。……

ヨハネは精巧な議論やきめの細かい理論によってメッセージを宣布したのではなかった。びっくりさせる厳しいものではあったが、同時に希望にみちて、「悔い改めよ、天国は近づいた」という彼の声が荒野から聞こえたのである。……無学な農夫や漁師が周りの地方から集まった。ヘロデの兵舎からローマの兵士たちがやってきた。その隊長たちは腰に剣を帯びて、反抗のきざしがあればそれを鎮める準備をしていたのである。強欲な取税人は徴収所から出て来、サンヒドリンからは聖句を唱えている祭司たちが来て、あたかも魔法にかかったかのように、皆聞き、皆……自分の罪を自覚して心を切り裂かれて……去って行った。……

ヨハネの時代になされた働きのように、現代も、天の雲に乗ってこられるキリストの再臨に先立って、同じ働きがなされるであろう。神は、主の大いなる日に立つために民を準備させる人々を召しておられる。……キリストが間もなく来られることを信じる民として、私たちは「あなたの神に会う備えをせよ」というメッセージを携えている。私たちのメッセージは、ヨハネのメッセージのように率直でなければならない。ヨハネは王をその不法のゆえに講責した。彼の生涯は危険にさらされていたにもかかわらず、神のみ言葉を宣布するのをためらわなかった。私たちの現代における働きも同様に忠実に行われなければならないヨハネが語ったようにメッセージを語るために、私たちは彼のような霊的経験を持たなければならない。同じ働きが私たちの内になされなければならないのである。私たちは神を見つめ、この方を見続けることによって自己を忘れなければならない。(福音宣伝者 54,55)

生きた聖なる供え物

「兄弟たちよ。そういうわけで、神のあわれみによってあなたがたに勧める。あなたがたのからだを、神に喜ばれる、生きた、聖なる供え物としてささげなさい。それが、あなたがたのなすべき霊的な礼拝である。」(ローマ 12:1)

主は、健康改革にご自分の民の注意を向けておられる。この健康改革は、人の子の来臨に備える働きにおける大きな部門の一つである。バプテスマのヨハネは主の道を備えるためにエリヤの霊と体をもって前進した。……

ヨハネは友人や世のぜいたくから身を引いた。ラクダの毛で織った衣という彼の単純な服装はユダヤの祭司や一般の人々の浪費や見せびらかしに対する絶えまない譴責であった。いなご豆と野蜜という純粋な菜食は、至る所にはびこっていた食欲の放縦と暴飲暴食の習慣への譴責であった。……キリストの再臨のために道を備えなければならない人々は、ヨハネがキリストの初臨のために道を備えるために、エリヤの霊をもって来たように、忠実なエリヤによって表わされている。改革の偉大な主題が提示されねばならない。……あらゆる事柄における節制がそのメッセージと結びつき、神の民をその偶像崇拜や食欲、また衣服その他における浪費から引き離すべきである。

神が特別に導き祝福しておられる義人に要求される克己、謙遜そして節制が、この墮落した時代に住んでいる人々の浪費や健康を損なう習慣に対比して、人々に示されなければならない。……この重要な主題を無視することほど身体的道徳的退廃の大きな原因となるものは他にない。食欲と情欲にふけり、やめたくない罪深い放縦を直視することを恐れて、光に目を閉ざす者は神のみ前に罪を犯している。一瞬でも光からそれる者は誰でも、その心をかたくなにして他の事柄を照らす光を軽視するようになる。飲食や服装に関する道徳上の義務に違反する者はだれでも、永遠の利益に関する神のご要求に違反する道を備えている。私たちの体は私たち自身のものではない。神は、ご自分が私たちに与えられたすまいを大切にすると私たちに求めておられる。この住まいは、私たちが自分の体を生きた聖なる、神に受け入れられる供え物として神に捧げることができるためのものである。(教会への証 3 巻 61-63)

9月25日

身を引く備えができている

「見よ、世の罪を取り除く神の小羊。」(ヨハネ 1:29)

国民に対するバプテスマのヨハネの勢力は、一時は役人や祭司やつかさたちの勢力よりも大きかった。もし彼が自分はメシヤであると名のつて、ローマに反乱を起していたら、祭司たちと民は彼の旗の下に集まったであろう。サタンは、この世の征服者たちの野心をそそるあらゆる報酬をバプテスマのヨハネに強調しようとしていた。しかしヨハネは自分の勢力の証拠を目の前に見ながら、そのすばらしいわいろを断固としてしりぞけた。彼は自分にそそがれる注意を他のおかたに向けた。

いま彼は人気の波が自分から去って、救い主に向かっていることを知った。日に日に、彼のまわりの群衆が減っていった。…

ヨハネの弟子たちはヨハネのところへ……きて「先生、ごらん下さい。ヨルダンの向こうであなたと一緒にいたことがあり、そして、あなたがあかしをしておられたあのかたが、バプテスマを授けており、皆の者が、そのかたのところへ出かけています」と言った(ヨハネ 3:26)。こうしたことばによって、サタンはヨハネを試みた。ヨハネの使命はまさに終ろうとしているように見えたが、彼がキリストの働きをさまたげることはまだ可能だった。もし彼が自分自身に同情し、自分が取りかえられたことに悲しみか失望を表明したら、彼は不和の種をまき、ねたみを助長し、福音の進歩をひどくさまたげたであろう。

ヨハネは人間に共通の欠点や弱点を生れつき持っていたが、神の愛にふれることによって生れ変っていた。彼は利己心と野心にけがされていない雰囲気のように住み、ねたみという毒気にまったく超越していた。……救い主の働きの成功を目に見ることは彼のよろこびであった。……

ヨハネは、信仰をもってあがない主を見たとき、自己否認の高さにまでたかめられた。彼は人々を自分にひきつけようとしないで、むしろ彼らの思いをだんだん高めて、ついには彼らが神の小羊イエスに目を向けるようにした。彼自身は一つの声、荒野の叫びにすぎなかった。いま彼は、いのちの光であられるおかたにすべての人の目が向けられるために、自分はよろこんで沈黙し、世間から忘れられることに甘んじた。神の使命者としての召しに忠実な人たちは自分にほまれを求めない。自分を愛する思いは、キリストへの愛によってなくなる。(各時代の希望上巻 210-213)

わたしは衰えねばならない

「こうして、この喜びはわたしに満ち足りている。彼は必ず栄え、わたしは衰える。」
(ヨハネ 3:29,30)

地上歴史のあらゆる時期において、神はご自分のみ業を推進するために代表を持っておられた。……バプテスマのヨハネには、主の道を備えるという特別な働きが与えられた。(SDA バイブルメントリ- [E・G・初付・コメント] 5 巻 1115)

キリストの伝道が始まった後、ヨハネの弟子たちがヨハネの所へ来て、すべての人々が新しい教師に付き従っていると苦情を訴えた時、ヨハネは自分がメシヤと自分との関係をどれほどはっきりと理解しているか、また、自分がその道を備えたお方をどれほどの喜びをもって歓迎しているかを示した。(教会への証 8 巻 333)

ヨハネは改革者として先頭に立つように召されていた。そのためにヨハネの弟子たちは……ヨハネが神の働きのうつわにすぎないという事実を見落して、注意を彼に向ける危険があった。しかしヨハネの働きは、キリスト教会の土台を置くのに十分ではなかった。彼が自分の使命を果たした時、彼のあかしでは達成できなかったほかの働きがなされるのであった。彼の弟子たちはこのことを理解していなかった。キリストがおいでになって、この働きに着手されたとき、彼らはねたみと不満を感じた。

いまでもこれと同じ危険がある。神はある働きをさせるためにある人を召される。そしてその人がその働きをなす能力があるところまで仕事を進めると、主はこんどは他の人を用いてその働きをさらに進められる。だがヨハネの弟子たちのように、多くの者は、その働きの成功が最初の働き人によってきまるかのように思うのである。注意は神よりも人に向けられ、ねたみがいりこみ、こうして神の働きがさまたげられる。このように不当にほまれを受けた当人は、自信をいなくように誘惑を受ける。彼は自分が神に依存していることをみとめない。人々は、人間の指導を信頼するように教えられ……神から離れさせられる。神の働きには人間の肖像や刻印はおされない。主は時々、別のうつわを持ってこられるが、その人を通して神のみこころは最もよく成就されるのである。おのれを低くして、バプテスマのヨハネのように、「彼は必ず栄え、わたしは衰える」と心から言うことのできる者はさいわいである。(各時代の希望上巻 215, 216)

9月27日

彼を偉大にしたもの

「あなたがたによく言うておく。女の産んだ者の中で、バプテスマのヨハネより大きい人物は起らなかった。しかし、天国で最も小さい者も、彼よりは大きい。」(マタイ 11:11)

バプテスマのヨハネを偉大にしたのは何だったのであろうか。彼はユダヤ国民の教師から示される伝統の大部分には心を閉ざし上からくる知恵に心を開いたのであった。(両親、教師、生徒への勧告 445)

バプテスマのヨハネは、エルサレムの学校における国の偉大な人々との交わりによつては、キリストの先駆者という高い召しにふさわしい者とはならなかった。彼は荒野へと出て行つたが、そこでは人間の習慣や教義が彼の思いを形造ることはできず、彼は神となんの妨げもなく交わることができた。(クリスチャン教育の基礎 123)

バプテスマのヨハネは生まれた時から聖霊に満たされた人であつたので、彼が生きていた時代の墮落した影響力に心を動かされなかった人が居るとすれば、まさしく彼であつた。しかしヨハネはあえて自分の力を信頼しようとはしなかった。彼は自分の生来の愛情が自分にとってわなとなるかもしれない友人や親戚から離れた。不必要に誘惑を受ける場所に身を置いたり、賛沢や生活上の便利さが自分を安逸に導いたり、食欲を満足させて、自分の体力や知力を減ずるような場所に、自分の身を置かなかった。……

ヨハネは荒野で、不自由と孤独に身をさらした。そこで彼は自然という神の偉大な本を研究することによって、神の威厳についての聖なる観念を保つことができた。……道徳上の観念を完全にし、たえず目の前に主を畏れるということが彼の意図した環境であつた。キリストの先駆者であるヨハネは邪惡な会話や世の墮落した感化に身をさらさなかつた。彼は罪が自分にとって非常に罪深く思えなくなるという、自分の良心への影響を恐れた。彼は自分の感覚が周囲によって正道からそらされることのない荒野に住居を持つことにしたのである。キリストがこの人について、「女の産んだ者の中で、バプテスマのヨハネより大きい人物は起らなかった」と言われたほどに、榮譽を授けられた人の模範から、わたしたちは何か学ぶべきではないだろうか。(教会への証 4 巻 108, 109)

キリストのため牢獄に

「あなたがたはキリストのために、ただ彼を信じるだけでなく、彼のために苦しむことをも賜わっている。」(ピリピ 1:29)

バプテスマのヨハネは、キリストの王国について一番先に告げ知らせたが、彼はまた苦難を受けることにおいても最初であった。……彼はいま獄舎の壁の中にとじこめられていた。……何の変化もなく一週また一週と過ぎて行くにつれて、落胆と疑惑が彼の心にしのびこんだ。彼の弟子たちは彼を捨てなかった。……しかし彼らは、もしこの新しい教師がメシヤなら、なぜヨハネの釈放に努力しないのかと質問した。……

救い主の弟子たちと同じように、バプテスマのヨハネは、キリストの王国の性質を理解していなかった。彼はイエスがダビデの位につかれるものと期待した。ところが、時が過ぎても、救い主が王の権威を主張されないで、ヨハネは困惑し、心配した。……悪魔のささやきが彼の心を苦しめ、非常な不安の影が彼にしのびよる時があった。長い間待ち望んでいた救い主がまだ現われておられないということがあり得るだろうか。……

しかしバプテスマのヨハネは、キリストへの信仰を捨てなかった。…彼は、イエスにメッセージを送って質問しようと決心した。彼は、この役目を弟子たちのうちの二人にまかせた。……弟子たちは、イエスのところへやってきて『『きたるべきかた』はあなたなのですか。それとも、ほかにだれかを待つべきでしょうか』とのことばを伝えた。……

救い主は、弟子たちの質問にすぐにはお答えにならなかった。彼らがイエスの沈黙をあやしみながら立っていると、病気の者や苦しんでいる者たちが、いやしてもらうために、イエスのところへやってきた。……イエスは、人々の病気をなおす一方では、彼らにお教えになった。……

こうしてヨハネの弟子たちが、すべてのことを見たり聞いたりしているうちに、一日が過ぎて行った。最後にイエスは、彼らをみもとに呼んで、あなたがたが見たままのことを、行ってヨハネに告げなさいと命じられた。……イエスの神性の証拠は、悩んでいる人間の必要にそれが適用されることに見られた。……

弟子たちは、メッセージを伝えたが、それで十分だった。……キリストのみわざは、彼がメシヤであることを宣言しているばかりでなく、彼の王国がどのような形で建てられるかを示した。……いまヨハネは、キリストの使命の性質をもっとはっきりとったので、生きるにも死ぬにも、愛する働きのために最もよく役立つように、神に献身した。(各時代の希望上巻 265-271)

9月29日

最高の栄誉

「また、からだを殺しても、魂を殺すことのできない者どもを恐れるな。むしろ、からだも魂も地獄で滅ぼす力のあるかたを恐れなさい。」(マタイ 10:28)

多くの人々の心にとって、バプテスマのヨハネの運命は、深い神秘につつまれている。なぜヨハネは牢獄の中で衰弱し、死ぬがままに放っておかれたのかと彼らは質問する。われわれ人間の目では、この暗い摂理の神秘を見通すことはできない。しかしヨハネはキリストと苦難を共にしたにすぎないのだということをおぼえているとき、神に対するわれわれの信頼は決して動揺させられることがない。……

イエスはご自分のしもべを救い出すために手をお出しにならなかった。イエスはヨハネが試練に耐えることをご存じだった。救い主は、よろこんでヨハネのもとに行き、ご自分がそこにおられることによって暗い牢獄を明るくしようと思われたことだろう。だがイエスは、ご自分を敵の手に渡して、その使命を危険にさらすようなことをなさらなかった。イエスはよろこんでご自分の忠実なしもべをお救いになりたかった。だが後年牢獄から死へ移らねばならない幾千の人々のために、ヨハネは、殉教のさかずきを飲むのであった。イエスに従う者たちが、……ひとりさびしく獄舎の中で弱りはてたり、剣やごうもんや火あぶりの刑で殺されたりするとき、キリストご自身がその忠実さについてあかしされたバプテスマのヨハネが同じ経験を味わったことを思って、彼らの心は、どんなにかささえられることだろう。

サタンは、神の使者の地上生活を中断することをゆるされた。だがこの滅ぼす者も、「キリストと共に神のうちに隠されている」生命には手をつけることができなかった(コロサイ 3:3)。サタンは、キリストに悲しみを与えたことに狂喜したが、ヨハネを征服することに失敗した。死そのものはヨハネを永遠に誘惑の力のとどかないところにやってしまったにすぎなかった。……

もし神の子らが始めから終りを見通すことができ、神の共労者として自分の果している栄光ある目的をみとめることができたなら、彼らは、神がみちびかれる以外の道を決して選ばないであろう。天に移されたエノクも、火の車で天へのぼったエリヤも、ただひとり牢獄の中で殺されたバプテスマのヨハネより偉大であったのでもなければ、彼よりとうとばれたのでもない。「あなたがたはキリストのために、ただ彼を信じるだけでなく、彼のために苦しむことをも賜わっている」(ピリピ 1:29)。天が人に与えることのできるすべての賜物の中で、キリストと共にその苦難にあずかることは、最も重い信任であり、最高の栄誉である。(各時代の希望上巻 280-282)

真の証

『『ヨハネはなんのしるしも行わなかったが、ヨハネがこのかたについて言ったことは、皆ほんとうであった』。そして、そこで多くの者がイエスを信じた。』(ヨハネ 10:41, 42)

ヨハネが生れる前に、天使は、ザカリヤへのお告げの中で、「彼は主のみまえに大いなる者となり」と言った(ルカ 1:15)。天の神の評価で、大いなるものとは何だろうか。世の人々が大いなるものみなしているもの、すなわち富や階級や名門や知的な才能自体ではない。……神がとうとばれるのは道徳的価値である。愛と純潔とは、神が最もとうとばれる特性である。ヨハネがサンヒドリンの使者たちの前で、人々の前で、自分の弟子たちの前で、自分自身の誉を求めようとしないで、イエスを約束のおかたとしてすべての人にさし示した時、彼は、イエスの目に大いなる者となった。キリストの働きにおける彼の無我のよろこびは、人間のうちにあらわされた最高級の気高さをあらわしている。……

ヨハネが自分の使命に感じていたよろこびは別として、彼の一生は悲しみ的一生であった。彼の声は荒野よりほかのところではめったにきかれなかった。彼は孤独な身分であった。彼は自分自身の働きの結果を見ることをゆるされなかった。キリストといっしょにいて、大きな光に伴う神の力のあらわれを見る特権は彼になかった。盲人が見えるようになり、病人がいやされ、死人がよみがえらせられるのを、彼は見なかった。彼は、キリストのすべてのことばを通して光が輝き、預言の約束が栄光に照されるのを目に見なかった。キリストの大いなるみわざを目に見、キリストのみことばを耳に聞いた最も小さい弟子でさえ、この意味において、バプテスマのヨハネよりも大きな特権があった。したがってヨハネよりも大きい者といわれているのである。(各時代の希望上巻 273, 275)

エリヤのように、天から火を呼びおろしたり、死人をよみがえらせたり、モーセのように、神のみ名によって権力の杖を使うことは、ヨハネにゆるされなかった。彼は、救い主の来臨をさきぶれし、その現われに対して備えるように民に呼びかけるためにつかわされた。彼は、その使命を忠実に果したので、彼がイエスについて教えたことを人々が思い出したときに、彼らは、「ヨハネがこのかたについて言ったことは、皆ほんとうであった」と言うことができた(ヨハネ 10:41)。主の弟子たちはみな、キリストについて、このようなあかしをたてるために召されているのである。(同上 274)

研究 8

わたしたちが信仰の一致に到達するまで



聖霊による一致

語る言葉が一つになるように、イエスのみ言葉によって清いくちびるが与えられることを見てきましたが、さらに次のみ言葉が与えられています。

聖霊による一致

「平和のきずなで結ばれて、聖霊による一致を守り続けるように努めなさい」(エペソ 4:3)。

最後の時代に用いられる教会は一つになっています。そして、その一致は、「聖霊による」ものです。たとえば、レンガであれば、セメントによって一つの建物にしますが、キリストに築かれる教会は御霊によって一つに築き上げられます。ですから、その一部となるためには、聖霊がどのように働かれるかを知る必要があります。

わたしたちは、初期の教会がどのように一つになっていたかを聖書に見ることができます。彼らは、「心を一つにし思いを一つにして、だれひとりその持ち物を自分のものだと言主張する者がなく、いっさいの物を共有にしていた」(使徒行伝 4:32)。だれが一つだったのでしょうか？

最初に「信じた者の群れは」とあります。「信じた者の群れは、心を一つにし思いを一つにして、だれひとりその持ち物を自分のものだと言主張する者がなく、いっさいの物を共有にしていた」。信じた者の群れは、御霊によって一致し、御霊によってその一致が保たれていました。

「どうか同じ思いとなり、同じ愛の心を持ち、心を合わせ、一つ思いになって、

わたしの喜びを満たしてほしい。… キリスト・イエスにあっていただいているのと同じ思いを、あなたがたの間でも互に生かしなさい」（ピリピ 2:2, 5）。「さて兄弟たちよ。わたしたちの主イエス・キリストの名によって、あなたがたに勧める。みな語ることを一つにして、お互の間に分争がないようにし、同じ心、同じ思いになって、堅く結び合っていてほしい」（コリント第一 1:10）。

体である教会には、様々な肢体がありますが、どうしたら、「頭」と「足」が同じことを語ることができるでしょうか？例えば、肢体のどこかが痛いときのことを考えてみましょう。「足」が痛むとき、「口」は「痛い」と言い、「目」からは涙が出ます。

初期の弟子たちが、どのように一致したかを証の書は次のように述べています。

「これら最初の弟子たちには著しい相違点があった。彼らはこの世の教師とならなければならなかったが、性格的にははなはだしく異なるさまざまな型を代表していた。この人たちはゆだねられている仕事を立派に進展させるためには、素質も生活習慣も違うので、感覚、思想、行動において一致する必要がある。この一致こそ、キリストが確かなものにしたいと目指されたものであった。キリストは最後まで、ご自身と一つになるよう弟子たちを導かれた」（患難から栄光へ上巻 12）。

「感覚、思想、行動において一致する」とありますが、この感覚と思想は、品性を形成しています。「思想と感情（感覚）が結合して道徳的な品性を作り上げている」（青年への使命 83）。つまり、品性と行動がキリストに一致するようになったのです。そしてキリストは、一度の再臨で、一つの品性を持っているすべての者を連れて行かれます。

考え方は感じ方に影響を与えますが、すべきだと考えても、「その気（感覚）になれない」人が、どのように一致することができるのでしょうか。

聖霊による一致とは何か？

自分の領域を越えることを transgression、trespass と言います。例えば、ヨハネ第一 3:4 には、律法を越えること（transgression of the law：不法）が罪だと述べられています。

その反対の変化もあります。著しい相違点のあったキリストの弟子たちは、どのように一致したのでしょうか。エペソ 4 章のつれあいとなるコリント第一 12 章

を見ますと、次のようにあります。

「霊の賜物は種々あるが、御霊は同じである。務は種々あるが、主は同じである働きは種々あるが、すべてのものの中に働いてすべてのことをなさる神は、同じである。各自が御霊の現れを賜わっているのは、全体の益になるためである。すなわち、ある人には御霊によって知恵の言葉が与えられ、ほかの人には、同じ御霊によって知識の言、またほかの人には、同じ御霊によって信仰、またほかの人には、一つの御霊によっていやしの賜物、またほかの人には力あるわざ、またほかの人には預言、またほかの人には霊を見わける力、またほかの人には種々の異言、またほかの人には異言を解く力が、与えられている。すべてこれらのものは、一つの同じ御霊の働きであって、御霊は思いのままに、それらを各自に分け与えられるのである。からだの一つであっても肢体は多くあり、また、からだのすべての肢体が多くあっても、からだは一つであるように、キリストの場合も同様である」(コリント第一 12:5-12)。

このように著しい相違点のあった個々人を一つにしたのは、一つの御霊によって与えられた種々の務めでした。そして、この 12 章の結論が 14 章です。

「しかし、すべてのことを適宜に、かつ秩序を正して行うがよい」(コリント第一 14:40)。

12 章と 14 章に間にある 13 章は中心です。すなわち、12 章は機能、13 章は心、14 章は組織を述べています。そこで、教会組織を理解する必要があります。なぜなら、12 章に忠実に従うとき、必ず 14 章に至るからです。組織を嫌う精神は、自己中心の思いであり、御霊の働きに反しています。

マタイ 25 章では、主人が旅に出るときに、自分の僕たちに自分の財産を預ける譬によって同じことが教えられました。主人が僕たちの能力に従って預けたタラントが、コリント第一 12 章にある御霊による種々の務めです。そして、このタラントを忠実に用いて増やす者、すなわち自分に与えられた働きを忠実になし遂げる人々こそ、主人の帰りを準備して待つ教会です。ですから、マタイ 25 章は、「あなたがまたおいでになるとき」を尋ねた弟子たちにキリストが答えて下さったアドベンチスト(再臨信徒)のための章です。そこでは、タラントを忠実に増やした者が忠実な者だと言われています。そうです、主人から預かったタラントは、増やすために与えられています。ですから、再臨のための本当の準備とは、タラントを増やすことであり、自分に与えられた働きを忠実になし遂げることです。こ

の僕たちが主人のために忠実に働くとき、「種まく人に種と食べるためのパンとを備えて下さるかたは、あなたがたにも種を備え、それをふやし、そしてあなたがたの義の実を増して下さるのである」(コリント第二 9:10)。

タラント、働きは種々ありますが、これらは「一つの同じ御霊の働き」であるとあります(コリント第一 12:11, 1)。「からだ一つであつても肢体は多くあり、また、からだのすべての肢体が多くあつても、からだは一つであるように、キリストの場合も同様である」(同 12 節)。つまり、この「霊の賜物」を受けた人々は、忠実に働くことによって、一つになるということです(同 1 節)。

「わたしたちも数は多いが、キリストにあつて一つのからだであり、また各自は互に肢体だからである。このように、わたしたちは与えられた恵みによって、それぞれ異なった賜物を持っているので、もし、それが預言であれば、信仰の程度に応じて預言をし、奉仕であれば奉仕をし、また教える者であれば教え、勧めをする者であれば勧め、寄附する者は惜しみなく寄附し、指導する者は熱心に指導し、慈善をする者は快く慈善をすべきである。愛には偽りがあつてはならない」(ローマ 12:5-9)。

御霊の賜物を受けた人々は、愛によって、それを授けてくださった主人のために、ひいてはこのお方の教会のために働きます。これが聖霊によって一致する神の民の目に見える姿です。

一方、聖霊を受けていない証拠が次のように述べられています。「あなたがたの間に、ねたみや争いがあるのは、あなたがたが肉の人であつて、普通の人間のように歩いているためではないか」(コリント第一 3:3)。「わたしたちは、自己推薦をするような人々と自分を同列においたり比較したりはしない。彼らは仲間同志で互にはかり合ったり、互に比べ合ったりしているが、知恵のないしわざである」(コリント第二 10:12)。

ですから、使徒は次のように勧めています。

「今生れたばかりの乳飲み子のように、混じりけのない霊の乳を慕い求めなさい。それによってお育て、救いに入るようになるためである。あなたがたは、主が恵み深いかたであることを、すでに味わい知ったはずである。…この主のみもとにきて、あなたがたも、それぞれ生ける石となつて、霊の家に築き上げられ、聖なる祭司となつて、イエス・キリストにより、神によろこばれる霊のいけにえを、ささげなさい」(ペテロ第二 2:2-5)。

「そこで、こう言われている、『彼は高いところに上った時、とりこを捕えて引き行き、人々に賜物を分け与えた。』」（エペソ 4:8）。この賜物（聖霊の賜物）を管理するのが、教会の組織です。「まつりごと（統治）はその肩にあり」（イザヤ 9:6）と言われたキリストが頭であるこのお方の体（教会）は、「すべてのことを適宜に、かつ秩序を正して行」います（コリント第一 14:40）。これがイエスの望まれる教会の姿であり、昔、偽預言者バラムが呪おうとしても呪うことができなかったときのイスラエルの姿でした。

この教会組織が管理する領域は、行うこと（do）に関してです。「異言を語る者は自分だけの徳を高めるが、預言をする者は教会の徳を高める」（コリント第一 14:4）。「教会は奉仕するために組織された」（患難から栄光へ上巻 1）。この伝道のための組織が、福音の秩序です。

神の民が再臨のメッセージによって、諸教会から呼び出されたとき、魂の命の言葉を伝えるために、特別に「福音の秩序」に関して主から示されました。「わたしは福音の秩序ということ、人々があまりに恐れ、また、おろそかにしているのを主に示された。（注 再臨信徒は、あらゆる教会から来た人々であった。そして、はじめ、彼らは、別の教会を起す考えはなかった。1844 年の後で大混乱が起きた。それで、大多数の人々は、福音の完全な自由に矛盾するという理由で、どんな組織にも強く反対した。ホワイト夫人の証と活動は常に、狂信に反対を示したものであって、混乱を防ぐためにある種の組織は必要であるということが、彼女を通して与えられた教えの中で、早くから強調されていた。）…

天には秩序がある。キリストがおられたとき、教会には秩序があった。そして、彼が地上を去られたのちも、秩序が彼の使徒たちの間で厳格に守られていた。そして、今、この最後の時代にあつて、神が、神の民を信仰の一致に導こうとしておられるときに、これまでよりも、もっと真の秩序がなければならない。「教会は、神の言葉に逃れていって、これまで無視されおろそかにされていた福音の秩序に固く立たなければならない」と天使は言った。これは教会が信仰において一致するためには、どうしても必要なことであった。…」（初代文集 189-200）。

「牧会を支援するために、新しい伝道地における働きを進めるために、諸教会と牧会を無価値な会員から守るために、教会の財産を守るために印刷所を通しての真理の出版のために、そしてその他多くの目的のために、組織は欠くことができない」（牧師への証 26）。

い存在が近づき、天地が揺れ動きます。彼は喜ばしい任務をもって訪れ、彼の飛ぶ速さと力が、強大な地震のように地を揺さぶりました。兵士たち、将校たちそして見張り人たちは死人のように地に倒れてしまいました。

救い主の墓には、また別の見張りがいました。悪天使たちがそこにいました。神の御子が死に下られたので、このお方の体はその時でさえ、死の力を持つ者、すなわち悪魔の餌食だと主張されていたからです。

サタンに使たちは、どんな権力もイエスを自分たちの手中から奪わないように見張るためにそこにいました。しかし神の御座からつかわれた力強い存在が近づくと、彼らは恐怖のうちにその光景から逃げ出しました。

天使は墓の入り口にある巨大な石をつかんで、あたかも小石であるかのように転がしました。それから地を震わせる声をもって、彼は叫びました。

「イエス、神の御子よ、姿を現してください、あなたの父が呼んでおられます!」

すると死と墓を越える力をご自分のものとされたお方が、墓から出てこられました。開かれた墓の上でこのお方は「わたしはよみがえりであり、命である」と宣言なさいました。天使の万軍はあがない主の御前に崇敬（すうけい）のうちに低く頭をたれ、賛美の歌でこのお方を迎えました。

イエスさまは勝利者の足取りで出てこられました。このお方の御前に地は揺れ動き、いはずまはひらめき、かみなりがとどろきました。

キリストが命をお捨てになった時刻が地震によって示されました。またこのお方が勝利のうちに命をお取りになった瞬間が、再び地震によってあかしされました。

サタンは天の使者たちが接近したときに、自分の使たちが逃げ出したことに激しく怒りました。彼はキリストがふたたびご自分の命を取り上げることがないように、また贖いの計画が失敗するようにと期待していました。しかし、彼が救い主が勝利のうちに墓から出てこられたのを見たとき、すべての望みが失われました。サタンは今や自分の王国が終わり、そしてついには自分が滅びなければならないことを知りました。

ひよこ豆のベジメンチカツ風

■材料 (10 個分)

ゆでたひよこ豆	400g
玉ねぎ (みじん切り)	1 個
キャベツ (みじん切り)	1/6 ~ 1/4 玉 (量はお好み)
干し椎茸 (乾燥状態)	ひとつかみ分
自然塩	小さじ 1 (味見して調整)
昆布顆粒だし	少々
パン粉 (衣用)	適量
小麦粉 (衣用)	適量

■作り方

1. みじん切りにした玉ねぎ、キャベツ、干し椎茸を甘くなるまでよく炒め、塩少々で下味をつけておく。(みじん切り野菜は、かなり甘さを感じるまでじっくり炒めます。)
2. ゆでたひよこ豆を粗くつぶす。(タネはひよこ豆だけでまとまりますので、小麦粉などのつなぎは特にいれなくて大丈夫です。)
3. 2に1を混ぜ、塩と昆布顆粒だしで味付けする。(ひよこ豆と野菜を合わせたら、味見をして美味しいと感じるところまで塩を足します。)
4. 3を均等に分け、成型して水溶き小麦粉→パン粉の順につけて油で揚げる。

教会プログラム (毎週土曜日)

安息日学校 : 9:30-10:45 (公開放送)

礼拝説教 : 11:00-12:00 (公開放送)

午後の聖書研究 : 14:00-15:00

【公開放送】 <http://www.4angels.jp>



聖書通信講座

※無料聖書通信講座を用意しております。

□聖所真理



お申込先 : 〒350-1391 埼玉県狭山郵便局私書箱 13 号「福音の宝」係
是非お申し込み下さい。

書籍

【永遠の真理】聖書と証の書のみに基づいた毎朝のよみもの。



【安息日聖書教科】は、他のコメントを一切加えず、完全に聖書と証の書のみに基づいた毎日の研究プログラムです。



イエスの物語

第54話

主はよみがえられた(1)

救い主の墓を守るために細心の注意が払われ、その入り口は巨大な石で閉じられていました。この石の上にローマの封印がなされ、その封印を破らずに石を動かすことはできないようになっていました。

墓の周りは、ローマの兵士が警備をしていました。彼らはイエスさまのお体になにかがおこらないように、厳重な警備をすることになっていました。彼らのうち何人かは、他の者が近くに地面で休んでいる間、つねに墓の前を行ったり来たり歩き回っていました。

しかし、その墓の周りには別の見張りがいました。天からの力の優れた天使たちがそこにいました。天使の見張りのうち一人でも、自分の力を発揮することによって、ローマの軍隊全体を打ち倒すことができたのでした。

週の第一日目の朝の前夜がゆっくりと過ぎていき、そして夜明け前の一番暗い時間が来ました。

最も力強い天使の一人が天から送られました。彼の顔は電光のようで、彼の衣は雪のように真っ白でした。彼は自分の通り道からやみを分け、全天は彼の栄光に照らされました。



眠っていた兵士たちは目を覚まし、立ち上がりました。畏敬(いけい)の念と驚きをもって彼らは開かれた天と、自分たちに近づいている輝かしい光景を見つめました。

他世界から力強

(43 ページに続く)